和文教科書 いさよひの日記 三卷

T 1A1
10
Sh 51

図書 和図書 適
a1380321197a
福岡教育大学蔵書

源歌子編輯

和文教科書

東京書肆 中央堂發兌

福岡教育大学図書
35.12.15
18377

和文教科書三之巻

美濃　源　歌子編輯

いさよひの日記

阿佛

むかしゝうゑのなつよりもとめいでたりゝん、ふみの名は、今の世の人の子は、美ばりもゝ、ゆのうへのことゝは、ゝ、ゝゝりけりふみづゝきのをうのくずをゝかへすゞもかゝさをくあとたゝうふしどもかひなきものは、たやのいとめをりゝ又けんもうの人をすてたまはぬまつりごとゝもも

○けるとぞ

れ、ちう士んの世をなげふたなきけまもすてらるるものハかずなるぬ効ひとつなりけりと思ひ出りあるゝ、又さてしもあるでなほこのうれひこそやるかくるくかなるけれ。さに思ひつゞくれば、やまとうたの道ハ、たゞまことすくなく、あゞなるすゝみばりとゞ、たゞもの人もやあるん。日のをれゝにあまのいはとゞ、ひゝけーときより、よものかみたちれがぞこのことばをそゞめて、世ををゝめものをやはゝぐるなうだちとなりみけるとぞこの道ハしゞりたちハ出るゝたう

らそ、道とハ名詞のあゝべきをはぶきたるなり。とはいふ辞のけをうけるなるもあゝぐべきなり。十六夜日記はもかゝること多し。思ひしるべしらず。

れしりゝる。さても、又集をえゝぶ人ハ、ためしおほのれしども、二たび、勅をうけてゝ、にゆえあげたる家ハ、たゞひ、きほ、ありがゝくやありけん。そのあとゝもたづさはりて、みたりのをのこどもも、もちれ奇のふるほぐどもをいうるえゝうありけん。あづかりもたることあれど、道をたゞけよ、ふをはぐゝめ。ほの世をとへとてふうきちぎりを、むすびれうれしゝ、細川のおゞれも、故なくぜきとゞめゝれしかバ、跡とふのりけども、しゆも、道をまもり、家をたすけん、たやこの余も、

もろともに、きえをあらそふ、年月をへて、あやふく、心ぼそきものかなとなるまでつれなくけふまでいきるべきにんをもとかぬ、ゆひとつはやくたもひすつれども、子をおもふ、心のやみは、なほ志のびがたく、道をかへりみるうゝみはやらんかなくなくてもなほあづまのかゝれ鏡にうつさば、くもゝぬかげもやあらはるゝとぜめてたもひあまりて、筆のはゞかりを忘れ、ゆをうきものになしはてゝ、めくりもるくいとよふ月よさそはれ出るんとそだもひまぬ。さりとて、父母のやすひでうさをふまもあらず、住むべきゆゑもとゆるもあらずこゝろはゝみたつはじめ、ふるゝずをはずもたえず。あらにきほふ木の葉へなみぢとともに、みだれもりつゝとにふれて心ぼそくかすけれど、くやりなるぬ道なれば、つきうしとてもどまるべきもあらでいなとなくいそぎたちぬ。めかれぜりつるほどだに、あれまきりつゝ、庭も、まがきも、まゝてと、みまはされて出さはすげなる人こゝに、袖のゝづくもなぐさめかねたる中

みも、志ゞゆうの大夫などの、あるがちに、うちくつ
しゝゝきまいと心ぐゝけしばさまぐいひて
しらへ、ねやのうちゝしがむしの枕のさゝがゝ
らかはらゝぬをみても、今さらかるゝてかさは
らにかさつく。

とゞめたくふるきまくゝのちりをだに
我たちさゝぐたしのはらそん

よゝにかきおうしけるうたのさうゝどもの、た
くがさるゞしてあぐるぬかぐりをえりさた
ためて、志ゞゆうのかゝくへたくるとて、かきそへた

。かゝりぐと
かゝりぐとゝゝ、
源氏末摘花巻
ヨ（ふみなどやう
なゞゞ）ゝゝゝ
れもゝかゝりぐ
とゝゝゝず）とあ
るゝゝ、清息文
まある詞なて、

ゝうた、

わのゝうにかきとゞめたるもゝほぐさ
こしをゝゝのかゝみともゝ見よ

あふうこよこゝるみうくふゝまちどり
いとかさるゝぬあゝをわるはゞ

こしをみて、侍従のうくでとゝいとくあり。

つひよもあぐるかるゝもゝほぐさ
かゝみをゝゝのあゝたのこゝさば

まゝはすまゝをゝへどりせばはまちどり
いとうくるゝぬあゝをそしとも

斉はるは、土佐日記に、この歌をいとうとかへ、ものぐるほしくなりぬべかりしものを、いひなりくらす。さらぬよごとあかつきぐるまいかよどや。

このかへり事いとたゝるるけれバ、心やすくあはしるるも、むこうのくにに、きうせたてまつりたくて、又うち思ほたれぬ。夫は、かゝはらぬ。さらずるんきつるを、ふりすてらんもなごり、あるかぎりに思ひ出りてよおもひ出るをこれバ、

はるゝとゆくさきとほく出るはして
いのちをるくるのこゝをあぐめん

と、かきつけるる。物より、ことに、あはれまて、おなじかたにうゆきそへり。

つくゝとこゝふなごのあそこひしくバ

みちとほくともはやうてうこん
とぞなぐさむる。山より、出るのあにのりしも、
いでたちみむとてはるたりそしもいと心ぼ
そとだもひたるをこのまゝひどもをみて
まくかきそへり。

あだるのそるざいかけゞ蛙ぐらも
心よゆきてたちうくるほど

とハ、ことといみーながゝ、涙のこぼるゝをあゝ、
うる、物いひまぎらすもさまゞ哀なるをあ
ぐりのきみハ、山ぶしまて、此人ちハ、見なり。此

たびのみちにさるべき送りまらんとて出るを、
うめるをこのほとゝひるに、又まゝらはゞらんや
ハとて、かさつく。

たちをふぢうりうる蔵ごろも
かゝみをたのむ釈のまもりハ

女ゑハ、あまくもなしたゞひとりまて、はゞろ、ち
うきほどの、女院さまゝ、ひ給ふ院のひめ宮、一
ぞくろ、うましたまふ、ぜうりうまて、心づうひも、ま
ことしきまもて、たとなくおはすしバ、宮の
御かゝのこひしさもかねて、やおくついでゑ、侍

從太夫などの事、はゞゝきたぼすべきよしも、こ
まうにかきつけて、おくに、

君をこそあさはとたのめなつに
のこるなでしこ宮にかゝすな

とゆえたしバ、御うへりもこまやうに、いとあは
れにかきて、奇のゑしるハ、

おもひおく心とゞめバふるさとの
志もまうしゞやまとなでしこ

とぞある。三りのこどもの奇のこりるくかきつ
づきぬるもかつハいとをこがましくれどおや

のこゝろは、あはれにたぼゆるまゝに、かきあつめたりさのゝ心よりはゝ、なくゝてもいうぐとてつれなくふりすてつあはさぐちといふところより、東にかへりつゝ、うどゝなくゝ、あふさのきさゝゆらほど、

さぐめなき命いきぬたびまれど
まゝあふさうとたのめてぐゆく

のぢといふ所ハこゝかゝ行きき人もみえず。はかくれうゝりていとはづなゝと思ふに、ゆ面さへうちゝぐ。

。たのめてたのりてハたのまりめてそれをゝくるはかなてず。たのみその、馬ゝ深うよて、ゆゝぬ深う。

うちゝぐれふるとたもと袖ぬれて
ゆくさきさゝ行きのぢみさのはゝ

こゝひいかゞみといふ所ゝ、つくべゝとさぐめつれど、くれはてゝゆきつうずもりやまといふ所ゝとぐまりぬ。こゝもゆ面ゝ忘たいきよけり。

いとゞなほ袖ぬゝせとやゆどりけん
まゝくさぐれのもる山ゝ

けふハ十六日の夜ゝまりけるいと苦ゝくて、ふしぬ。いまゞ月のひかりかすゝにのこりたる、あ

けぶりのにもり山をいでゝゆくやすの川、ゐるかどゝさきだちてゆくたびゝとの、こまのあしおとばうりゝさやうまてきゝわいとふうし。

たびくいみふもろともあさたちて
こまうちゐるすやすの川ぎわ

十七日の夜ハ、をのゝ志ゆくといふ所、ゐるとゞまる。月いでゝ、山のゝねゝ、立つゞきたる、杉のホれまゝ、けぢめみえていとおもしろしゝ。夜ふうき、雨ふれまゝいゝ、たどりいでつゝさめゞ井といふ水、夏なゝバうちすぎまうやとたまふに、かゝる人ハ、ゐ立ちてゝむめり。

むすぶまにゝゝごゝろをすぎなバ
うきゝの夢やさめゞ井ゝゝ

とゞぶおぼゆる。

十八日、みのゝ國せきの関川、ゐるほどゝ、まづたもひつゞけゝる、

我こども君ゝつうへんためるゝで
ゐゝゝまゝやハせきの関川
ふゝの関屋ゝいゝびゝゝい、いまもかはゝどり

けり。

いまたかきふきのせきやはこのほどの
　さぐれもつきもいうよもるん
関ぢも、かさくつる、あめ、さぐれは過て、ふり
くせば、道もいとあしくて心より外はかさぬ
いのうまもとゝまる、くれをねどとゞまる。
　たびくいみのうちはふゆぐれの
　あめにやどるかさぬいの里
十九日、又こゝをいでゆくよもすがら、ふりつ
る雨にいらせとゝもゝ、稲のみちいとゞ見ろ
くて、人かゝゝべくもあゝねば、水田のおもをぞ、

さふゞゝろもゆく。あくるまゝに、あめはふり
ずもりぬ。ひるつかさ、すぎゆく道は、めにたつや
しろあり。人はとへば、むすぶの神とぞきこゆる
といへば、
　まもれたゞちぎりむすぶの神ならば
　とけぬうゝみるよしまよはさで
すのまゝとゝやゝ、川はは、舟をなゝべてまき
きのつるもあゝんかけとゞめゝる、うきは
ありいとあもふゝれどゝるこの門づみに
うゝはいとふゝくてかゝくはあさゝれば、

かゝぶちに ふうきこゝろはあるぐ
人めづみにさぞせうそうん
かりのゝ ゆきゝとみるもはのあしや
月をうきゝふねのうきはすまて

とぐおくいつゞけゝる。又一宮といふやしろを
すぐゝて、

一宮名さへなつかしふたつあく
三ゝきのりをまもるべし

二十日、をけりの國おりゝゝいふうまやをゆく。
ようきぬをなれば、あつたのゝやへまわりて、ず

りゝといでゝ、かゝさつけてたてまつる奇、
いのるぞよりぶれまことなるみぐ
かゝしく三ほも神のまたく
なゝゝかゝわるの潮うぜへぐてずば
たゝゞゝろにかゝもうくゝしん
みつゝほのゝてぎつるるみぐ
神やあはれとみるめたづねて

☆かぜも神のゝゝろにまうすむ
ぶゝゆくきのさけりあゝすふ
三ふひのやどなれば、さけりなくひかゝをゆく

をりしも、濱ふる、いとおほくさきだちてゆくも、
さるべうかるゝこゝちして、
濱ちどりふきてぞさそふよのあるに
あととめんとはおもはざりしを
すゝだ川のほとりにこそ、ありとゆしかど、みや
こどりといふものは、はーとあーと、あうきは、この
濱よりありけり。
ことゝはんはーとあーとはあうどりし
さがすむかゝのゝやこどりかと
二むら山をこえてゆくに、山も野も、いとゝとをく

て日もくれはてぬ。
はるゝとこしやまを行きすぎて
あかすあつたゞる野べのゆめゝ
八橋よりまんといふ。くもきにはもみえ
ずありぬ。
さゝがきのつゝもであやふきハ橋を
タゞれかけてゆるうか
廿一日、ハはをいでゆくにいとよくはれた
り。山もとをかきはゝ野を分ゆく。ひるつかに
ありてもみぢいとおほき山よ、むかひてゆく。

につれなき雨くらくらち葉にうめかへてけりぞき
はぎども、立まどりてあをぐみまきをみる
こゝちすゑくさくへば、ぎぼうしの心よりも。
　　ぎぼうしけりそむるふゝかのはてゝいまく
　　もみぢのまきの色かはるまで
この山まで、むうみゝちするに、ろく
へうはゝねば、
　　まちけりかむうもこえて高地山
　　たまゞ　はぎのめぐりあるをを
山のすそ野に、たけのある所、かやゝの、一つみ

ゆゑ。いうまして、ふるのたゝりに、かくてすむ
んとゝゆ。
　　めゝやたれ山のすそ野にやどめて
　　あちさびしきたけの一むら
日は、いりはてゝ、ふほ、畑のあやめも、見のぬほど
よ、ゝふうどゝゝやゝ、所よとゞまりぬ。
廿二日のあつき、ぶうきありあけのかげよ、
いでゝゆく。いつもも物ゞなし。
　　もみぢして月のうゝやこをいでゝ
　　うき分はなれぬありなけのかげ

とぞ、たもいつゞくる。とも、なる人あり、ゆけの月
さへかさきりといふをきゝて、
たびゝのたもゝ道ゆやいでつゝむ
かさうちきゝてゝありあけの月
たうの山もこえたゞうみゝゆるほどいとたも
しろし。浦うぜあれて、松のひゞきすごく、浪い
とたうし。
ゝゝがたゆや浪もたうの濱なん
そでのみるとの波ゆやすまで
いと志ろきをぎきにくろきとりはむれゐる

ハ、うといふ、とりなりけり。
志ゝ濱にすゝのいろなる志まつゝる
よでのおゝばぐもるかさてます
さまふのはゝりみわるせバかもめといふ鳥、
いとたほくゝとびちゞいて、水のそこへもいる、岩
のうへまも、みゝり。
かもめみるすゞきのいはもうそなゝず
ふゝのかけこすゝ袖にみをして
こゝろいひくまの志ほゆくといふところに、とゞ
まるこのさゝろれ大方の名をバばま松とぞい

ひしぼうといひしばうりの、人々なるどもずむ
所なり。もみこ一人の、おもかげもさまざま思ひ
出られて、又めぐりあひてみつる命のほども、か
へるべくあはれなり。

涙まつかはるぬうげをたづねきて
みー人なるにむすーをぞとふ

うの世にこ一人のこうまごなどうびいでゝあ
ひ出づふ。

廿三日、天りうのるまりといふ。舟にのるに、西行
ゞむうーも、だもひいでられていと心ぼそく。

みあはせる舟、たゞ一つつまて、たほ〳〵の人ゆ
きゝにぞこうるひまもなし。

こづのあるうき世よわるほどをみよ
もや浦のふぶねさをもやすめず

こゝひいとほつあつまつ、見つけの里といふ所に、
とゞまる。さとあれて、抱おろしかさはゝよ、水
の外あり。

たれうきて見つけのさとゝゆかるる
いとゞたびねぞ宮おろしき

廿四日、ひるになりて、こやの中山こゆ。ことのま

たる山ぶし、彳あいしちう。爲も人をゐどむ、
をゐらぎとまねびたらん、ら〳〵ちしていとめづ〳〵
うゑだうしくも、あはれまもやさしくも、たぼゆ。
いそぐ道ありとゐへバ、又もあまさいえかゝず。
たぐやむごとなきとゐろひとつまぞだとづし
ゆゆゆる。

ゐぐゐゐろうつ、ともあゝうつの山
ゐなもとほきむうこゐとて
つたゐへで出ぐしぬいまもうつの山
なゐぶに袖のいろぞこがる〳〵

こゐいいてゐゐとゐふところに、どゐまる。なゐま
がゝの僧正とゐやのぼるゐていと人出げゝ。
やどかりゐねたりつゝどゐにゐに人のなきや
どもありけり。

廿六日、ゐゐ出なゝ門とゐや、ゐゐりて、だきつゝ演
ゐうゐいづ。なゝゝいでゝ、あゐの月新るどま
づだいいでらる。ひるゐる立いりたる雨にあやし
きつげのをまゝあり。いとくゐけしバうち
ふゝたるに、すゝりもゐゆしバ、まゝゐゐ出やう
ゝに、ふゝるゐゐがきつけつ。

なかざりにみるめざうりをかりまくら
むきをじおきつと人はかくるな

くれかくるほど、きくこゝの関をすぐ。岩こすなの、
ふるきぬをうちきるやうにみゆるいとた
うし。

清乃ぶがくとまるいをにことはん
なくこのぬしぎぬいくかさねきつ

ほどもくくれて、そのまゝ海ちかきさとに、
とゞまりぬ。浦人の苫ぶきやとるのまくゆ
りかくるふりせいとむつてきまほしきれ

ば、荻はやどなまぐさしといひける人のことばも、思ひいでらるゝ。よもすがら、うぜいとあれて、浪たゞ、枕のしたにたちさわぐ。

なにはずはうそにゆこう清乃ぶがく
あいそもこのかくるねぎあハ

ふじのこをこれば、げぶりもたゝず。むらもち、の朝臣よ、こゝはしれていうるるみやうるれ
ばなどよみしこころ、とほつあふみの国までハ乃
しうば、ふじのけぶりのすゑも、あさゆふたう
にみえしものをいつのとしよりたえとい

へバ、さだうこうたるゝ人ゞにも、
たゞ方にもびきはてゝう富士のねに
けぶりのすゑのみえずもうもむ
古今の序に、と紫まで、なもい出れて、
いつの世にふもとのちりうふじのねを
ゆきさへたうきやまとなりん
くちはてしながゝのはをつくばや
ふじのけぶりもたゝずもりなば
こゝろひゝきのうへといふ所よやどりてあれ
たるかと、さらにめもあはず。

廿七日、あけもあれてのちふじ河をゝるあさ川
いとさゞ波がぞふれば、十五せをぞわたりぬる。
さえわびぬ宣ふりなるをふじのの
川かぜこほるみそろもで
けふは、日いとうゝかきて、たごの浦よりうちい
づあまどものいさりするをみて、
心からなりたつたごのあまごろも
ほさぬうゝみと人にうるな
とゞ、いはまほゝきいづのゝふとといふ所に、とゞ
まる。いまゞ夕日のゝるほど、みーまの明神へま

みるとて、よみてたてまつる。

あすれとやこまの神のこやげら

たゞこゝもめぐりきにけり

たのづつたへしあともあるものを

神ハ三つゝんきまのみち

たづねきてゆゞこゝかくるはらね路を

やまのかひあるまつるべとぞおもふ

廿八日、いづのこふをいでゝ、はこねぢにかゝる。

いまぶ夜ふゝりけれバ、

玉くしげこらねのやまをいゝげども

たゝ雲あけがゝき横雲のそら

あゝがゝこゝを、みちとほゝとてはこね路をかゝ

るなりけり。

ゆゝしとそよそるさ　ぬくもをそばゞて、

ようになゝぬるあゝがゝのやま

いとゝゝきやまをゝくだる。人のあゝも、とゞま

りがゝし。ゆゝうとぞいふなる。からうゞて、こえ

はてたれバ、又ふもとに、こゝや川といふ河あり。ま

ことにこゝやゝし。ふのおほくふゞるゝをいうみと

とへバ、あまのもほをゝうらへいゞゝんとて、

ながすがりといふ。

あづまぢをゆくうをこしてきわくせば
ふほまをぐるは門のうづ

ゆくうち、浦まいでゝ、日くれかゝるに、なかと
まるべき所とほし。伊豆山大ぜまでみるうさ
う海づをいづこと、へば、ちうふと、へば、ちうた
う人もなし。あまの家のうづある。

あまのすむうの里の名もたつきうの
ようすうぎうにやどやかりまし

まりこ川といふ河をいとくてたどりさ

海のうへをはるばるまかりまゝ、にはうとふをうりのつるのみをおらぬ思ひたゞふべうらず。

る。こゝらいはさうはといふ所に、とゞまる。あすハ、
かまくらへいるべしとなり。
廿九日、さうはをいでゝ、濱路をはるゞとゆく。あ
けそるゝ、うみのうへをいとほそき月いでた
り。

浦路ゆく心ぼうさを波まちし
いでゝ、たつすりありなけの月

なぎさによせうくる浪のうへは、きりたちてあ
まくありつゝ、ほりぶねみえずまりぬ。

あまふ舟こぎゆくかゝをみせどとも

浪はたちそふ浦のあをぎり
みやこ、とほくへだてはてぬるも、なほ蓑の心
ちして、

立はなれなもうきなるミかかけもせず
むかしの人とおもふ世なるべ
あづまにてすむ所ハ月かげのやつとそ、ふなる
るうらちかき心もとなくて、風いとあらしぶ寺の
かゞはらなれバ、のどかなるすごくておうのたと、
ねの風たえず。みやこのおもとづれハいつしか、た
ぼつうふきほどもうつの山をて、ゆきあい

たりし、ふぶしのたよりにことづけやたりし人
のほもとより、たうなる、たよりにつけてあり
しほうへとおぼしくて、

たびごろもきるぶをそへてうつの心
さゞれぬいまもさゞぞしぐるゝん
ゆくりなくあくがれいでしいとよいの
月やおくれぬうらみをるべき

みやこをいでしことハ、神無月十六日なりしか
バ、いとさゆ月を、たぼめ、わをしざりけるに
やとゝいとやゝしく、あはれまてたゞこのえし

ぞうりをぞ、又きこゆる。

めぐりあふすゑをぞたのむゆくすゑも

やすらうしいさよひのつき

さきのうしやうをもうそ、ためのりみち女、奇よ

むくて、ちよくせんをも、たびぐ八たまへり。

大宮院の権中納言とき、こゆる人、奇の事ゆゑ、胡

タヤかしこうばうや、道のほゞのおぼつかなき

などおとづれたまへる文に、

はるゞとおもいそやしたびごろも

なほぐ忘ぐるほどやいかゞと

うへ〜に、

たもとやれつゆも忘ぐれもひとつまて

山ぶきけこ袖のしづくと

けせうとのだめうねの君も、おなじさまに、おぼ

つかなきなどかきて、

ふるさとはけ宵にたちし蛍ごろも

ゆきやいとぐさえまさるらん

返し、

たびごろも浦ぜさえて神無月

しぐるゝそにこそぞふりそふ

ものきうんもんみんれ、みくしげどのときこゆる
ハ、こがれた政大臣の御女、これも、續後撰より、お
つぎ、二たびこゝびの家〳〵みうちぎ〳〵まも、歌、
あまくいり給へる人をもしれば、御名もかくしなく
さそハ、いまハ、あんかもんみんに、御かさとて、さ
ぶ〳〵ひたまゝ。あづまぢにたもひ立ーあすとて、ま
うりやれよりに、小白川どのへまゐりーかど、み
えさせたまはぢりーかば、こよひばうりの、出た
ち、地ゝゝぢーくて、かくとだるよきこえあへず、い
そぎいでーまも心まか〳〵給ひてだとづしき

こゆ草の枕ゝぢ〳〵、手ゝくれぬる心ぼそさ、ゆ
きれひまなさふど、かゝきあつめて、

きえかへりまぢむ〳〵うもかさくれて

ほどハくもみぞゆきにまりゆく

などきこえたりーを立かへりこの清返事だよ
りあ〳〵バと、心にうけまゐ〳〵せつるをけふハ、ま
ちすの廿二日、文まちえてめづ〳〵くうれーさ、
まづ、何事もこまかゝやたくれに、こよひハ、御か
たゝがへのぎやうぐうは、御うへよりてまぎるい
ほどゝて、おもゝばうりも、いうゞと、ほいなうこ

そ。御たびあすとて、まゐりあつけるヨしもみ
ねどの、もみぢ見まとて、わうきく、さそいよ
しほどよ、後まして、かくる事ども、きこえいしう。
なごやかくとも、御たづねいはぐりし。
いとかくに袖やぬれまし　猿ごろも
たつはをきうぬうみすりせば
さてもそれより、重にまゐりぬくと、わしをうれし
御返事ハ
かきくしゆきふるさとのあづめも
ほどハくもみれあはれをぞしる

と、あれば、このたびハ、又たつはを、さ〳〵ぬとある。
御返しばかりをぞきこゆ。
心うつるなうしんたびごろも
たつはをだにもさ〳〵ぞかはるて
曉、たゝりありときいて、よもすがら、おきゐて、都
の文ども、かく中に、こと〳〵へだてなく、あはれを、
たのみうはしるあね君よ、をさなき人〳〵の事、
さまざまにかきやるほど、れいの浪風ばかりしきき
こゆれば、たゞいまあらまいの事をぞ、かきつけ
ける。

夜もすがらなくぶもしもかくさあへず
いうこすきるみよしいとりなきあて
又たなびきまさて古つよい、こい志のぶたとう
とのあまうへまも、ふこたたてまつるとて、いそも
のなどのばしぐもいそ、つゝみあつめて、
いそづゝよめかり志ほやくすゝびまも
こしやまるし里れあまびと
ほどへて、このたとゝいふたりれかへりごと、い
とあはれまて、ふれば、あねぎみ、
たまづさをみるにまゝぶのかゝうふ

いそこうすなゝふきくゝもして
このあね君ハ、中かゝんれ中将と、ゆえ一人のう
へまち、今ハ、三位入道とゝ、たなど世ふぐゝとほ
ざうはて、たこるひゝるゝ人ありそのおと
うとのきこもめかり志ほやくとある返事、ま
ぐよかきつけて、人こゝろ、ゝるなゝぶのうゝハ、都
まもまくゝの志ほにたゝへてなどやゝくか
きて、
もろともにめかり志ほやくうゝまゝば
中ゝ袖に波ハかけじをを

この人も、あんゐもんに、さぶらひしまつ
つきくすることぐもを、たもいつゝねてかさ
たるも、いとあはれまもたうしほどるく手くれ
て、春まもおりまくゐ。かすみこめるなゞめの、
たどゝしさ、谷のアハ、とゐりなれども、うぐい
すだにつゐだまも、だとづしうずだもいなれは
しはるの空ハ、三のびがくむうしのこしき
ほどまも、又みやうのたゞりありとつげたる、
人あれば、れいの、ゐくへみ文かく中に、いさよ
月と、おとづれたまつりしくの法もとへ、

なぐろうまる月ハみやうの空ゐぐ
まぶきうぐりしなゝのるく
などそこはゝとなき事どもを、かきゆえたり
をたゝかゐる所より、つたはりて、ゆうえりごと
をいゝうほどもへずまちみたてまつる。
ねゝれじなみやこの月を光にうつて
あれぬまくゝのなゝれよるく
権中納言の君ハ、まぎくることるくうたをよみ
たまふ、人なれば、山ほどてるゝひゐ三ゐる、奇ど
も、かきあつめてたてまつる。海ちうき所るれば、

かいるどひろゝおもゝるぐるのはまるゝねゞな
ほなきこゝちしてなどかさて、

いうにしてさばゝらやうをゝしたしぶい
まゝのひまるゝくわしぐゝぐる
さゝぐりし浦やまかぜもうめぐゝハ
うゝやうに似るゝはるのあけぼの
はるぐりなぐめてゝる浦うぐに
かすゝたぐゝふはるのゝ月
あづまぐだいゝやまうぜのたえまより
なゝさへ花のかたもかげゝたつ

みやこ人おゝひもいでゞあづまぢに
花やいうゝとたゝづれてきし
などたぐゝふでにまうせてたもふまに、いゝぐぎ
たゝつういとてかきゝもやうまりを又ほど
へずゐ〇ーなまてり。日ごろれなぐつゝるさも、
このゝにかすゝはれぬる心ちしてなどあり。
たのむぐよさゝひょひろゝうつせがい
かひあるゝのたちかへる世を
くゝべゝよかすゝのゝちれ春の月
をれぬこゝろいおなぐゝるぐめを

きてなるかいろもひとつにちるゑを
たもひやさへはきげるたつ
あづまぢはきてをみてもそしずば
みやこのはるをくやとはまし
やよいのまつうぐいすはやみよ
や、日まぜるおくることと、二たびまるりぬあや
うきをしてくる心ちしるぐ、三たびまるる
べき、あうつきよりだきみて、佛のほまへまて、心
を一ちてほくるきやうをよみつゝその きる
うや、なごりもなくたちくるをりしも、みやこの

たよりあれば、かゝる事こそあど、みるさへもつ
げやる、ついでよしいの権中納言の御もとへだ
びのやうてあやるきほどの心ぼそさもさすが
にたゝつ、法の きるしるや、けふまでいかけと
どめてとかきて、

くづるあまの きるやくけぶりとも
たれうはみましかぜよきえたなば

と、ゆえたりしをだにうまてかへしとくきた
まへり。

きくえもせずわのの浦路よ手をへて

いうをそのあるあまのもしほ火
ほきやうの言葉いとたふとくて
たのもしかりにそふもとありすくち
たへるのりみちのちぎりハ
卯月のはじめつかたもあれば又おなじく人
の海なこぞのはるつかたしきるどかき
て、
そしらそかはしぞくめられはて
はるゝりるつにうつることずるも
ゑぐろもはやたちかへてみやこびと
いまやまつらん山ほゝぎす
又れうへ又あり。
くるもまもこぶみまにかはねど
ありしまも四めぬこちのしてて
さてほゝぎすの海とけたづねて、
人ちもこゝろつくしてほゝぎす
たづ一こをけふぞゆつる
さねかづの中将は五月までゆるきうでみちに
くにより、やこよいまきいみるすゝん郭ゐせき
のこゝろは分こそ　けしとうやゆたるた

こゝのいまるゝのためしとたゞひいでられて、
この文ゝそゝこゝにやゝくなどかきてだらせ
給へりゝさつほどゝ卯月のまにゝすりけれバほと
とぎすのみとつまるゝほつゝもゝたゞたえゝゝ人
づてゝのきけバひきのやつといつゝゝあきゝを
ふきけるゝを人ゝゝゝゝなどいふをきゝて、
　志のびねハひきのやつなる郭公
　やゝみにたゝくいつゝなるらん
などいとりたゝへゝゝゝのかひあゝ。もゝよ
り、あづまぢハみちのおくまでゝゝゝ時鳥

まれなるゝゝひゝやありけん。すぐに又なゝ
ずバゝゝぎれもきくゝ人ありけるゝゝ人ゝきゝ
しけゝよと心づくゝにうゝめしけれ。又くゝと
くもんゝんゝに新中納言ときゝゆるハ、京極の中
納言定家に佛むゝゝ、ふゝゝゝのゝさきの富宮と
きこえゝにちゝの中納言はゝまゝゝゝせたきたま
へゝまゝて年へたまひうけり。此女ゝんハ富
宮の御子にゝたてまつりたまへりゝかバつた
はりてゝさゝゝひ給ふまりゝうきゝゝゝゝもか
り舟などゝみたまへゝりゝ民部卿のすけのぜう

とうてぞおはすつる人のこうて、あやしき奇
よみて、人よハきうれしゝと、あふぐらにてみ給
しゝうどゝばうなるたびのそゝにおぼつかなき
に、あはれなる事どもをかきつけて、
いうげうりゐをおつるのよびとれ
なゝはぬたびのそゝにきてん
と、父のことばよつぶけて、奇のやうもあらず、
かきあつたまへるもくべよりハまわぶりなるず
おぼゆ。ゆうへり事ハ、
うれしゆゑたとびとうれてもありたづね

ふをおもふかゝさハなほそかなりき
と、きこゆ。そのついでに、故入道大納言くゝのま
ゝうもたゝちそいてゝ、まにみえそせ給ふとおも
ど、この人ばうりや、あはれとも、おぼゝんとて、か
きつけてたてまつる。
みやこまでかゝるもとほ　おひねる
　　三のぶむう　の巻のなぐりと
はうるやたびねの巻にまゝひきて
　　ゝむれバみえぬ人のおもうげ
などかきてたてまつりを、又あふぐらにたよ

りたづねてうへりごとしたまくりぞしも、さの
びたまへりしもをりかくをりけり。

あづまぢのくさのまくらはとふらしど
かくしばちうきいきしのゆめ

いづくよりたびねのまにかふるん
なもいおきつるつゆをたづねて

などのたまくり。ふつのほどいあやしきまでお
とづれもたえて、おぼつかなくもあるかな。
都の方ハさうの浦浪たち、山三井寺のさらぎも
ど、ゆゆるもいとどたぼつかうまつ。からうじてハ

月二日ぞ、つゝひきちえて、日ごろのよりたきたり
けり。人〳〵の文ども、とりあつめてみつる。さうの
のさいさやうの、君のもとより、五十首の歌をよ
みたりけるとて、きくよかきもしあへずくぶされ
たる寄もいとたうとく、なりにけり。五十首に、十
ハ首、てんあいめるもあやしく心ゆきのひゞ
めるそあるめ。その中に、

心のゝへだてずとてもたびごろも
山ぶかくなるをみれとてくも

とある寄をみるに、たびのそらを、思ひおこせて、

うまれたるようこそいと、心をやりてあはれなれ
ばゝの歌ひとゝはゝに、もじちひさく返事をぞ、
かきゝへてやる。

こひしきのぶこゝろやたぐゝあゝゆゑに
ゆきてはうくるをもれきてくも

又だちぐ たびのだいきて、

かりそめのくれまくのふゝを
おもいやるゝも 袖ぐつゆけき

とあゝ、ゐにも、又うへりごゝをぞかきそへたる。

秋ふゝきくゝのまくゝにもしぐれなく
ふりすてゝこゝすぐむしのねを

又、こゝの五十首は、奇のおくに、ことばをかきそゝ。
大かゝ、奇のくゝまをもどきゝ、つけておくに、もゝ
一の人くゝは奇、

これをみばいうばりうとなもいつる
人ゝかはりてしねゝそなゝうし

とかゝきつくゝぶ。ぶのうのたゝうと、たゝめもりの君は、
もゝとゝりも、三十首の奇をおくりてこれをぞ、ん
あいてゝろうゝん事をこまかゝきつゝたべと、
いゝとしゝりことゝは、十六ぞかゝ。奇のくゝまは

ハ、やゝくたぼゆるも、直すぐ心のやゝとゝかたはらいゝくちんこれも、たびの奇よハこゝたくをむもいてゝよみうけりとゝゆゝりしなどのにつきをこの人〳〵もとゝつけたりしをよましたりけるなめり。

立わうれゝのけぶりをみてもなほ
こゝろぼそくこのいうにそひけん

まゝこれも道しをかきつく。

かりそめに立わうれてもゐをなほ
おもひをゝのけぶりぞこゝ

まゝ、権中納言の君こゝまやうに文かきてかりたまひしーはハ、奇よむなもなくて、秋よりてハいとゞおもひいでゝきこゆるまゝに、ひとり、月をのゝ、なゞめあゝてなゞとかきて、

あづまぢのそらつゝきかくみゞに
たゞのみなるゝ月うげ

この歌ゐ事これも、古のこゝろさをどかゝて、

かゝるゝやうこのほの月みても
そなつゝきおなゞ　なゞめハ

みやうの字ども、こゝは、おほくつゞりたるなり。さ、かきつくべし。

○本書、此次に、長歌やうれいと長やうなる歌、まゝ、奥書やうのものあれども、和文に用ゐけれバ、今ハはぶきつ、

和文教科書三之巻終